

Bird, Graham, and Ann Helwege, eds.: *Latin America's economic future*, London, Academic Press, 1994, 339p.

本書は、1992年にサリー国際経済研究センターで行なわれたセミナーにおける研究成果をまとめたものである。全編を通して、80年代にラテンアメリカで支配的となった新古典派的経済政策の、90年代における有効性、および持続可能性をテーマとしている。このテーマにそって貿易、国際収支、安定化政策、財政改革、開発戦略、所得分配、国家の役割、といったさまざまな側面からの分析が行なわれている。

論文集という体裁を採っているため、個々の経済政策に対する評価は各章で異なる。しかし、今後の経済動向については、1980年代後半にみられた高成長、および外国資金の流入は望めない、という点で一致している。また、昨年末からの金融危機に関してみれば、80年代末からの貿易収支赤字拡大の傾向と流入資金の短期化、および所得格差の拡大に対する懸念が、実証データに基づいて正しく指摘されている。

経済統合の進展など中南米経済をとりまく環境は今後激動が予想されるが、本書は、1990年代の中南米経済を考える上で貴重な視座を提供している。

(北野浩一)

Dunkerley, James : *The pacification of Central America: political change in the Isthmus, 1987-1993*, London/New York, Verso, 1994, xiii+150p.

冷戦後の世界では地域紛争、民族紛争、内戦が各地で多発しているが、中米では冷戦期に最高潮に達した地域紛争が東西冷戦体制の終焉とほぼ軌を一にして終結した。

本書は地域紛争終結のための話し合いの出発点と

なったエクスプレス合意の年1987年から93年までという、中米現代史の最も波乱に満ちた時期を対象に、政治変動を中心とする主要なトピックに焦点を当てて簡潔にまとめたものである。扱われているトピックは、経済、軍事、米国の政策、パナマ危機、麻薬と汚職、難民問題、選挙と法の支配、ニカラグア、エルサルバドル、グアテマラ各国の紛争と平和の進展といったものである。

著者も断わっているように本書は深い考察に基づいた学術的な論考というものではなく、情報分析的なものであるが、複雑、煩瑣なこの時期の中米情勢を簡潔にまとめた点、巻末に政治のクロノロジー、主要統計資料が載っている点で役に立つ文献である。

(石井 章)

G・アンドラーデ；中牧弘允編『ラテンアメリカ 宗教と社会』（ラテンアメリカシリーズ6）東京 新評論社 1994年 271ページ。

ラテンアメリカは、史上初めてキリスト教が国教という形で強制的に導入され、社会形成に多大な影響を受けたという点で他に類をみない地域である。

本書の第1部は、カトリックおよびプロテスタントとラテンアメリカ社会の関わりを歴史的に検証することによって、現代ラテンアメリカにおけるキリスト教と社会、国家と教会の関係を明らかにしてゆく。第2部は、伝統的なカトリックではなく、大衆文化の中から生まれたさまざまな信仰を文化人類学的アプローチで解明してゆく。

本書はラテンアメリカ社会と宗教の関係を、神学的見地ではなく、歴史学的、文化人類学的見地から明らかにしており、とかく宗教になじみの薄い日本人がラテンアメリカ文化を理解するためのひとつの糸口となりえるだろう。

(村井友子)